

佳作

ぼくの妹、真ほちゃん

茨城県 高萩市立高萩小学校四年 石成一郎

「ただいまー帰ったよー。」
この言葉をぼくと弟のよし人は、待っていました。
た。

平成十六年五月十七日に妹の真ほちゃんが生まれました。弟のよし人がお兄ちゃんになれた日です。

すぐくうれしかった事だけおぼえている。それからしばらくは、学校から帰るのが楽しかった。しかし、とつぜん妹の真ほが入院してしまった。生まれつき頭の中にできものがあつたらしい。

お母さんも一しょに付きそつての入院だった。真ほは、なかなか良くならず、月日が過ぎていった。その間病院を次々と転院していった。そして、東京の病院で手じゅつをする事になった。

悲しかった、ぼくはない。なぜかなみだが出た。ずーつとお母さんに会えないからと、真ほが手じゅつして、いたい思いをしようのかと思うと、なぜかわからずつらい気持ちだった。

お父さんが、
「みんなつらいよ。でも一番つらくて、がんばっているのは、真ほちゃんだよ。」

といったので兄のぼくはもっと強くならなくてはいけないと思った。

ぼくのうちには、ばつちゃんがいる。七十五才になるおばあちゃんだ。お母さんのかわりに身のまわりのことをみてくれた。お父さんのお姉ちゃんたちもぼくたちのことをみてくれた。

みんなが助けてくれている。
真ほちゃんの入院でいろいろな事がわかった。だから神様に毎日お願いをした。死んだじっちゃんにも毎日いのつた。

もう、いろんなことが分かったから、真ほちゃん早く治ってー。

手じゅつもぶじに終わった。六ヶ月の長い入院生活が終わりました。その後も二度目の手じゅつをして、八ヶ月間真ほちゃんは、つらさにたえま

した。
「ただいまー。今度こそ本当に帰ったよー。」
お母さんと真ほちゃんが帰ってきた。

今年の夏休みはすごく楽しい。だって、みんないるんだもん。

